

令和5年度 園評価書

I 経営の重点に関わること

評価段階 (A:よくできている B:概ねできている、C:あまりできていない、D:できていない)

1 教育・保育目標	2 重点目標	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取組目標等)
心身ともに 健やかな子	自分のことが 好きと思える子	褒められたり、認められたりすることを積み重ねていくことで、自信をもって生活や遊びに取り組めるようにしている	・子どもの伝えようとする気持ちや話に耳を傾け、共感したり具体的に褒めたり認めたりしていった事で少しずつ自信をもって生活や遊びに取り組んでいる	A	A	・子ども達はとてものびのび過ごしている。危険がないように職員が努力してのびのび遊べるようにしていることがわかる ・子どもの目線に合わせることはとても大事だと思う。又、ギュッと抱きしめてあげる事で子どもは安心する。今後もスキンシップをとってほしい	・自信をもって生活している子もいればそうでない子もいるため、褒めたり認めたりして肯定的な言葉かけをして、関わりを積み重ねていく事で子どもが自分の良さに気付くようにしていきたい ・保護者からも褒められる機会が増やせるよう、子どもの姿をたくさん発信していく ・一人一人の伝え方や表現方法が違うので、見逃さないようにしたり先読みしないようにしたりして思いを受容していく ・自ら考えて取り組むためには保育者のさりげない援助が必要な時もある。保育者が一緒に遊ぶ中で、子どものつぶやきや視線、動き等に注目してきっかけを見逃さないようにしていく ・記録からの自身の振り返りや園内研修などで保育者の見取る力を向上させていく
		子どもが安心して自分の思いや感じたことを子どもなりに表現できるように関わっている	・子どもの仕草や表情を見逃さず、個々の思いに寄り添って関わっていった。また、話を聞く時には子どもの目線に合わせてしゃがんだり話始めるまで待つ等、保育者が先読みせずゆったりとした伝えやすい雰囲気を作っていった事で自分の思いを伝えようとする姿がみられる	A	A		
		子どもが様々なことに興味をもち、自ら考え取り組んでみようとする関わりを行っている	・まずは様々な事に興味をもつために戸外遊びの環境を改善し、子どもが自分で遊びを選べる環境を作った。また、子どもが遊びの中で「なんでだろう」「どうして?」等と考えられるような言葉かけをする事で、自分で考えて取り組んでみようとする意欲がみられていった	A	A		

II 各領域に関わること

大項目	中項目	評価指標	園説明	自己評価	関係者評価	園関係者評価委員から	改善策(来年度の具体的な取組目標等)
1 こども園における 教育及び保育	(1)0歳から小学校就学前までの一貫した教育及び保育	「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識し、一人一人の発達や経験に合わせた適切な援助を行っている	・週間指導計画の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に関連する内容にマーカーをし、どの項目が該当するのか記入をする事で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に対して意識がきっかけがある ・育ってほしい姿を踏まえ一人一人の発達に応じた支援ができるよう、クラスで話し合い共通理解した	B	B	・家庭状況を掴むことは難しいが、把握ができることと関わりのヒントになることもある。又、園内で話し合いの機会が多く作られていて良いと思う。 ・家庭状況等、職員間の共有はなかなか難しいと思う。小学校で感じることだが、職員室の雰囲気やよいと職員の横の繋がりがみられるのではないかと感じる。それは校長・教頭によって違ってくるのではないかと考えている。いつもいてくれて、見てくれている存在があることで教職員も安心して指導にあたれるのだと思う。それが教育に反映され家庭との信頼関係にも繋がりが、保護者も思いを直接伝えやすくなるのではないかと思う ・能登地震を踏まえ、地域との連携の大切さを改めて感じる。自治会では井戸を保有している方に、災害時に生活用水として使用させてもらえるか、聞き取りをするなどして協力体制を整えていっている。園では何ができるのかを考えていくと良い ・”かばんを背負う”事は、どの先生も同じ関わりをしているので親も子どもも意識が変わってきている事がわかる。担任以外の職員にかばんを背負っている姿を褒められる事はとても嬉しそうである。小学校では重いかばんを背負っての登校となるので、こども園の時から身に付けておくとうまい ・支援児に対して加配担当が足りていないが、職員がいても手をかけすぎるところがあるとのことなので、何かが起こったときに助けもらえる体制が整っていればよいのではないかと ・園内研修に関しては、保護者はどんなことをやっているのか分からない。自分たちがやっていることをもっとアピールしていけばよい ・保護者アンケートの実施方法が今年度からスマホ入力になったことで顔が見えないこともあり、発言しやすくなった人がいるのではないかと。保護者には話かけやすい人とそうでない人など様々なタイプの保護者がいる。話しかけにくい人ほど思いを内に秘めてしまう。思いが蓄積してしまったり爆発してしまったり。後から知る事はよくない。些細なことも伝えていく。気にかけてもらうことで安心する。まずは思いを受け止めたり、共感したりして信頼関係を築いていく ・小学校も園と繋がろうとしている。小学校を見ることで子どもは安心する。積極的に連携を取り合い交流をしていくとよい。子育てトークの会は、次年度はおしゃべりサロンの時に交流できるとよいと思っているので、検討をしてほしい	・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、年長児の公開保育時には検討する事が出来たが、今後は、園内研修で話し合う機会を増やし各々が意識できるようにしていく ・月の反省だけでなく保育者が困っている事や悩んでいる事に対しての対策を職員間で考えられるように職員会議内で時間を作る
	(2)一日の生活の連続性及びリズムの多様性への配慮	一人一人の家庭状況や在園時間を把握し、子どもが安心して生活できるよう配慮している	・家庭と連携しながら、一人一人の生活に合わせた配慮(午睡時間や、戸外からの入室時間等)をしているが、不安定な様子を見せる子どもの保護者への伝え方やタイミングが難しかった ・家庭状況を会議等で共有している	B	B		・伝えにくい事も少しずつ伝え合えるように保護者と信頼関係を築き、家庭に合わせた対応をしていく ・職員間で情報伝達は行っているが、伝えるタイミングが遅くなった事があったため、会議報告以外でも共有事項を書き出して朝打ちノートに綴る等、タイムリーに行うようにする
	(3)環境を通して行う教育及び保育	「今、楽しんでいる遊びは何か」「どんなところに楽しさを感じているのか」など、子どもの実態を捉え関わっている	・子どもと一緒に遊び同じ目線に立ちながら楽しさを探ったり、共感したりしていった。また、週案会議等で子どもの様子や環境について共有したり話し合ったりしていった事で子どもの実態を捉えて関わっていった	A	A		・子どもの姿を日誌に記録しながら自身の保育を振り返り、日々積み重ねていく事で捉えを明確にし、見取れるようにしていく ・フリー保育者にも担任の関わりのねらい等を伝え、職員間で共通理解して子どもに関われるようにする
2 安全管理・指導	(1)事故防止・防災	職員一人一人が安全・危機管理の意識をもち、非常時には適切な対応をしている	・年間計画に沿って避難訓練や不審者訓練を行い、自分の動きや役割を毎回確認していった。又、子ども達が訓練の大切さを意識するために、真剣に訓練を受けるように働きかけていった ・年度途中にけいれんへの対応について共通理解の必要性を感じたため、マニュアルを作成し職員間でロールプレイを行った	A	A		・様々な想定で訓練を行う中で、保育教諭が自身の役割を理解し、責任をもって行動できるようにする ・男女問わず不審者役を経験し対応に活かせるようにする ・書面のみでの反省にせず、会議などで対応方法を話し合っていく
3 保健管理・指導	(1)健康教育の充実	・基本的な生活習慣が身につくよう、個々に応じた丁寧な関わりを行っている ・健康的な生活習慣の必要性を子どもや保護者に発信している	・身の回りの事は保育者がやって見せる事で、身につけやすいようにした ・習慣づける項目を一つ決めて、全職員で徹底して働きかけた事により、子どもや保護者共に意識をもち習慣が付き始めている	A	A		・園と家庭との連携が難しいが、全職員が同じポイントを押さえて家庭に働きかけ、連携して取り組んでいく ・発信してもなかなか見てもらえないという所もあるため、関心を引くような内容を考えていく
4 特別支援教育・保育	(1)支援体制づくりの推進	個別の支援計画を作成し、職員間で情報共有をしながら支援方法を検討、支援している	・支援児担当者は月に1回加配会議を行いトーマスの会の企画や反省を行ったり、支援方法や悩みについて話し合ってきたが、サポートプランについて全職員で検討する時間を設けられるとよかった	B	B		・加配会議の中で支援児一人一人についてのサポートプランの検討ができるよう計画を立て実施していく ・職員会議でABC応用行動分析を行い、様々な職員が意見を出し合う事で保育者自身のスキルをあげていく
5 組織運営	(1)組織体制の充実	職員一人一人が自分の分掌や役割に責任をもつと共に、お互いに声をかけ合い協力して教育・保育を行っている	・職員間で声を掛け合い、協力しながら自分の役割は責任をもって計画的に取り組んでいるが、各分掌の仕事の進捗状況がわかりにくい所があった	B	B		・各分掌の進捗状況を可視化し、発信する事で職員が協力できる体制を作っていく
6 研 修	(1)研修体制の充実	子どもの「たのしい」を見取り関わるために、日々の手立てを行い園内研修を進め、学びを次の教育・保育に活かしている	・職員間で思いや考えの伝え合いを大切にしながら園内研修を進めた事で様々な捉えや考え方を学んだ。その学びを自身の保育に活かしていった事で、園の教育保育の質の向上に繋がっていった	A	A		・園内研修後も振り返りの場を作り、実践に繋げる意識を高くもてるようにする ・若手職員がわかりやすい研修内容を組み立てていく
7 教育・保育環境整備	(1)教育・保育環境の充実	職員は教材、素材の特性や用具、遊具の扱いについて学び、子どもの発達、経験、ねらいに合わせて準備を行っている	・園庭環境を改善した事で子どもがやりたい事や使いたいものを自分で考え選べるようになった ・学年会議の中で、制作について話し合いの時間を作り、教材を検討して保育に取り入れるようにしたが、職員会議等では時間がとれなかった	B	B		・教材研究に関してはもっと取り組みたいと意欲はあるが時間がもてず実践する所までいかなかった。今後は年間の中で回数を決め週案会議の時に行うようにする
8 家庭との連携・協力	(1)家庭教育への支援機能の充実	園での子どもの姿や教育・保育の意図について発信したり、保護者の思いを傾聴したりしながら子どもの育ちを共有している	・クラスボードやお便りでは子どもの育ちを伝えることを意識した。また、秋には個人面談を実施し、子どもの成長を喜び合ったり悩みについて丁寧に聞いたりして、家庭と子育てを共有できるようにしていった	A	A		・保護者を褒めたり認めたりして信頼関係を築き、前向きに子育てができるように援助する ・今後必要時に個別面談を設けるようにする。保護者からの申し出を待つばかりではなく、保育者が必要だと判断した場合は、声をかけていく
9 近隣の学校との連携	(1)近隣の園との連携の推進	近隣の園や小学校と交流の機会をもち、情報交換したり連携を図ったりしている	・近隣の園の公開保育や小学校の授業参観に多くの職員が参加できるような計画をたて、交流のきっかけを作ったり、自園の環境作り等に活かしたりしていったが、子ども同士の交流がもう少し行けると良かった	B	B		・子ども同士の交流時期を早めに計画していく(近隣校・園) ・近隣の園の公開保育には、様々な職種の職員が参観できるように早い時期から計画していく
10 地域との連携	(1)信頼される園づくりの推進	地域との交流を通し、園だけではできない体験をする機会を積み重ねている	・主に年長や年中児の取り組みとなり数少ない機会ではあったが、デイサービスへの訪問や勤労感謝訪問等で地域の方々と交流をもつ事ができた。しかし担当学年以外の職員は把握していないことが多かった ・地域の未就園児を招いてのおしゃべりサロンでは年長・年中児が挨拶や歌などを披露したりする事で地域の親子と親しむ機会になった。又、褒めてもらったりする事で自信に繋がる場となった	B	B		・散歩や出かける機会を増やしていく事で、年長児以外の子どもも交流ができるようにしたり、地域の情報を仕入れていく ・来年度のおしゃべりサロンでは、早い時期から園児の参加を計画したり、分掌が作成した図書だよりや保健だより等を配布し、園の取り組みを紹介していきたい